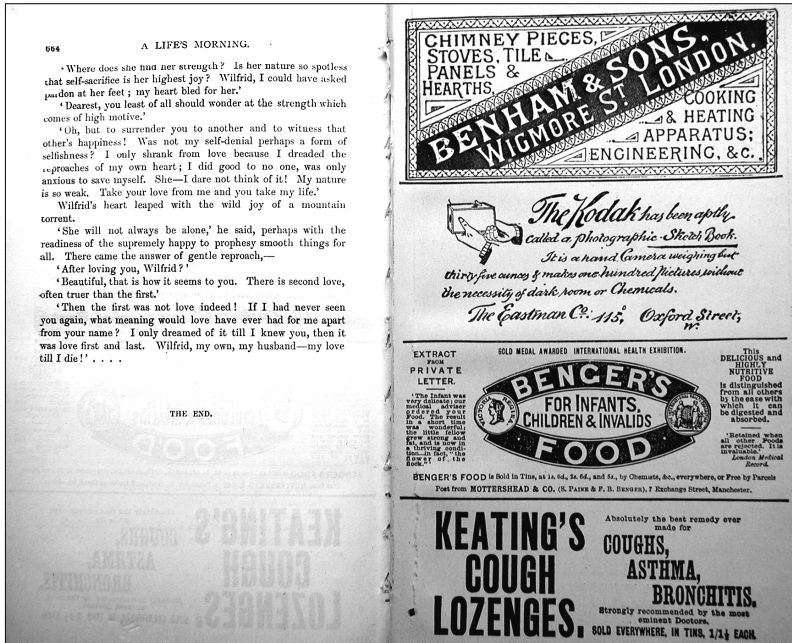


第八章

出版

—ギッシングと定期刊行物—

グレアム・ロー



左頁は『コーンヒル・マガジン』に連載された『命の冠』の最終回（1888年12月号）の結び。同じ1888年、「コダック」の創業者ジョージ・イーストマンは、「貴方はシャッターを押すだけ、あとは当社にお任せください」というスローガンを掲げ、当時の一般消費者に使いやすい画期的な新型カメラを発売した。右頁の上から二番目がその広告。

新たに刊行される定期刊行物『ペリオディカルミンスター』の広告に、寄稿者ジョージ・ギッシング氏の名前があるのに気づくと、いささか驚かれるだろう。その驚きは、彼がそこに名を連ねるべき人物ではないからではなく、私を知る限りは、この有力な作家が定期刊行物に姿を現したことがかつて一度もなかったからである。ようやく彼を見出した雑誌について、私は他にも幾つか聞き及んでいる。この作家の非常に優れた作品が比較的ずっと黙殺されてきた理由が、私にはよく理解できなかった。⁽¹⁾

この所見が発表されたのはイギリス文芸家協会の公認機関誌、『著者』の一八九五年一月号に掲載された文芸閑話の一つであった。発表した人物は、十九世紀最後の二十五年間で最も安定した成功を収めたイギリス人作家の一人、ウォルター・ベザントである。ベザントは、社会の中心人物としても、この月刊誌を創立した編集者としても、当時の文芸市場について最も博識な批評家の一人と称せられていた。しかし、この件についてベザントが誤解していたことは、ギッシング本人の私的な日記だけでなく、公的には彼の作品を再載した多数の出版物の編集者によっても、手短に指摘されている。実際、『ミンスター』の創刊号に載せられた物語『地の塩』は、定期刊行物に掲載されたギッシングの三十八番目の短篇小説であった。とはいえ、この数字は誤解を招く。ギッシングの初期に出版された短篇小説の大多数は、一八七六年九月からのアメリカ亡命中に、その

幾つかのジャーナル日刊新聞に匿名で掲載されているのに対し、彼がアメリカから本国に戻ってから一八九二年末までの間、ロンドンの出版界では一握りの小説しか掲載されていない。これらのうち、一八八八年を通して月刊誌『コーンヒル』に遅ればせながら連載された『人生の夜明け』が、最も目立つものであった。対照的に、一八九三年から彼の人生の最後までに、約八十篇が連載出版されたが、絶頂期を迎える一八九五年には、週刊誌『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』における中篇小説『イヴの身代金』（一八九五年）の連載に加え、二十七もの物語や小品が個別に出版された。このように、一八八〇年代当時に文筆で生計を立てていた大部分のイギリス人作家と比較すると、ギッシングの定期刊行物への寄稿は非常に間隔が空いていたが、この点に関しては一八九〇年代半ばに注目すべき逆転を見ることになる。冒頭に引用したベザントの所見は実質的に誤りだったにせよ、気持ちの上では真実に近かったのである。

しかしながら、本章の目的はギッシングの作品についての書誌的な知識に多少なりとも貢献することではない。すなわち、最近ピエール・クステイヤスが網羅的に記載した書誌（もちろん、上記に示した数値は彼のリストからの引用）と重複するような仕事ではない（*Custillas, Definitive Bibliography* 457-94）。より正確に言えば、後期ヴィクトリア朝の読者層に文学作品を提供していた当時の変貌する出版メディアを背景にして、どのようにギッシングの小説が展開して行ったか、つまり物語形式に重

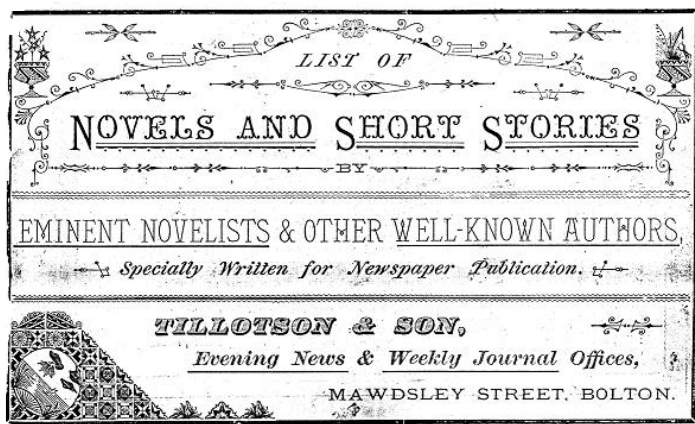
要な影響を与えた出版業のコンテクストを描き出すことが本章の目的である。そのような企ては無論、連載形式だけでなく、巻形式の出版にも注意を払わなければならないが、本章では紙面が許す範囲内でそうするつもりである。しかし、三巻本(triple-decker)形式の初版を突如として消滅させ、それを支えていた貸本屋(circulating libraries)を徐々に周辺に追いやってしまった一八九〇年代半ばまでの時代の影響については、ここ数十年の間に様々な観点から分析され、その間に得られた洞察はギッシング研究において評価されてきた。それに対し、後期ヴィクトリア朝における定期刊行物市場の質的な変貌が経済的、社会的、文化的研究の主題になったのは、ほんのここ数年のことであり、その成果については未だに周知されていない。結果的に、ギッシングとジャーナリズムとの関わりについての記述は、ギッシングと編集者ジェイムズ・ペインが『コーンヒル』で出会ったことについてのモリー・ロバーツによるメロドラマ調の記述(Roberts 90-92)を典拠とするなど、関係する編集者や経営者の個性に焦点を当てたものが多い。従って、筆者はここで、まず後期ヴィクトリア朝の定期刊行物市場において起こった変化全般との関係において、次に新しい出版形式が当時の支配的な文学形態に及ぼした特別な影響との関係において、ギッシングの連載出版物について論じながら、より公平な社会的分析を提供したい。

第一節 定期刊行物市場の変貌

決してヴィクトリア朝に考案されたわけではないが、書籍の形で上梓されるのに先立ち、新刊の小説を連載の形で出版することが支配的になったのはヴィクトリア朝のことであった。経済的理由と同様に審美的な理由のために、十九世紀後半まで小説の原作はほとんど新聞や雑誌のような定期刊行物に織り込まれるか、あるいは独立した分冊の形で初めて読者が入手できるものであった。もちろん、これとは別に引き続き再版のために様々な連載形式が利用されていた。週刊誌はもとも労働者階級を相手にした三文小説と関係があったので、月刊誌の方は前期ヴィクトリア朝における中産階級にふさわしい文学作品の連載出版の基準となっていた。言うまでもなく、ここで大きな影響力を及ぼしたのは、チャップマン・アンド・ホール社から出された『ピクウィック・クラブ』(一八三六―三七年)や『ベントリーズ・ミセラニー』に掲載された『オリヴァー・トウィスト』(一八三七―三九年)といった、ディケンズ初期小説の月刊分冊による出版であった。

しかし、煽情小説がブルジョア階級の読者層で流行し始めた一八六〇年頃から、様々な週刊出版の場が、品のよい作家たちにとって次第に利用できるようになった。その結果、ギッシング自身が作家稼業を始める頃までに、週刊の発行はすでに英国

における連載出版の最も優勢な形態になっていた。この傾向を促進する上で、『大いなる遺産』（一八六〇―六一年）が最初に連載されたディケンズによる二ペンスの雑録週刊誌『オール・ザ・イヤ―ラウンド』の役割は重要だった。しかし、質の高い挿絵と一シリングという安価で新世代の月刊誌が幾つか同時に現れたことで、首都ロンドンの市場における衝撃は弱まってしまった。一八六〇年、スミス・エルダー社による『コーンヒル』や六六年にベントリー社が引き継いだ『テンブル・バー』のように最も成功した雑誌は、当時の主要な小説出版社によって所有されていた。もともと地方においても、その影響ははつきりしていた。少なくとも世紀半ばから、地方作家による連載小説がスコットランドや北イングランドの安価な雑録週刊誌に登場し始めた。一八七〇年代初頭までに国のほとんどを網羅する小説の通信社ネットワークが存在していたので、首都で好評を得た作家は、潜在的な読者層と経済的な報酬の増加によって、すぐそのネットワークに魅了されるようになった。こうして、一八八一年にジェイムズ・ペインは、「地方の安価な新聞は：今や通信社のシステムのもとで、最も著名な小説家の活動を支配している」と自信をもって言った。ここでの先駆者は間違いなくティロットソン・アンド・サンという名前のボルトンの会社（図①）で、その時までにすでに北アメリカと植民地での海外市場の開拓を始めていた。しかし間もなく、地方の競争相手だけでなく、キャッセル社やナショナル・プレス・エイジエ



図① ティロットソン社による1884年頃からの既刊書目録の表紙

ンシーのようなロンドンの競争相手も現れた。ロンドンの出版界が失った基盤を取り戻そうとした方法はこれだけでなかった。むしろ長い目で見て重要だったのは、首都

における別の新しい種類の定期刊行物の出現である。その多くもまた週刊の出版であつた。顕著な特徴は豊富な挿絵を入れたことだ。特別な紙の上や薄紙の下に個別に入れたのではなく、地の文の中に埋め込まれた。同様に重要だったのは、主要な経営者がベントリー社のような家族経営の管理下にある古い出版社ではもはやなく、むしろ二十世紀初頭に出版帝国を築くことになる新型の有限会社だったという事実である。新しい出版界の実力者で抜きん出ていたのはジョージ・ニューンズであつた。彼の大衆向け「ペニー雑誌週刊誌『ティット・ビッツ』（一八八一年）や、中産階級の読者層向け六ペンス月刊誌『ストランド・マガジン』（一八九一年）は代表的な成功例であり、アルフレッド・ハームズワースやC・アーサー・ピアソンのようなライバルによって即座に模倣された。しかし、ここで同じように重要なのは、影響力のある六ペンス挿絵入り新聞『グラフィック』や『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』を中心に設立された会社である。ギッシングの活動した時期はずつと、これら二つの挿絵入り新聞が小説連載で最も名声と利益を高めた出版社の代表格であり、寄稿者の中にはウォルター・ベザントやジェイムズ・ペインがいた。

古い出版形態は新たな形態に取って代わられるというよりは従属する傾向があつたので、必然的に後期ヴィクトリア朝には小説を求める定期刊行物の競争の場を急速に拡大することになった。大衆向けに安価な版を販売するよりは、新作を貸本屋の

ために贅沢な版で出したがるヴィクトリア朝の書籍産業の保守性を考えると、これは連載出版で作家の受け取る収入が単行本出版での収入をしのぐことを意味する。しかし、出版社から得る報酬を最大にするには、文学市場についての十分な実用的知識が必要であつた。通常は二つの選択肢しかない。作家自身が商才を大いに伸ばすか、あるいは彼らのために行動してくれるプロの著作権代理人を雇うかである。もちろん多くの作家は両方を実践した。A・P・ワットの先駆的な仕事を示すように、プロの代理人の役割は明らかに広告を扱う通信社の代理人の役割から生まれたものであり、少なくとも初期の段階では単行本の権利よりは連載刊行物の権利に深く関わっていた。

第二節 連載出版へのギッシングの反応

後期ヴィクトリア朝における定期刊行物市場の変貌についての上記の概要が全体的に妥当であるにせよ、その変貌についてのギッシングの認識がどの程度で、彼がどのように反応したかという問題に取り組む必要がある。例えば、一八八八年一月一日に妹エレンに送った手紙の中で、分冊出版は「概して単行本形式の二倍の利益がある」(Letters 3: 172)と彼は書いている。この手紙が『コーンヒル』から十二回に分けて連載された『人生の夜明け』の第一分冊の出版と同時期だった——そのとき彼はスミス・エルダー社に単行本の権利を売却して五十ポンドと

いう僅かな金を得た——ことを考えるならば、彼は「概して」という言葉が自分自身に当てはまらないことに気づいて苦々しく思ったに違いない。少なくともその理由の一部は、彼の経歴の早い時期に新しい定期刊行物が人目につき始めたことに気づかなかったから、あるいはそれを無視しなかったからである。アメリカ逃亡生活の後半におけるギッシングの作だとされている二十余りの短篇小説のうち、大部分は一つか二つのシカゴの新聞社から出版された。これらの中で六作は『シカゴ・デリー・ニュース』に掲載されている。この新聞はやがてティロットソンス社小説部局の最も重要で長く続いたアメリカの取引先の一つとなった。⁽⁸⁾ しかしながら、ギッシングは英国に戻ると新聞通信社という選択肢を考慮しなかったようだ。ティロットソン・アンド・サン社が一八八八年のクリスマス用の物語をギッシングに求めると、彼は最初は否定的な反応をしてから、結局「議事堂でのクリスマス」(Diary 118-19; Letters 4: 14-15)に関する叙述的な一篇を提供した。これは一八八九年の後半に少なくとも四つの地方紙で同時発表され (Diary 502-03)、例のボルトンの出版社に対する彼の唯一の作品となった。同じ時期に『民衆』(一八八六年)が『マンチェスター・ウィークリー・タイムズ』の寄稿欄で再掲されて成功を収めているとき、出版の手配は著作権所有者のスミス・エルダー社によってなされていたが、その連載について作者自身が知ったのは、連載が終了する間際の一八八九年十二月五日だった (Diary 185)。他にギッシ

ングの作品が地方紙で出版されることは、彼の死後までほとんどなかった。

その代わりに、アメリカから帰国して十五年間ずっとギッシングが小説を提供した唯一の定期刊行物は、文芸出版社が所有する古株の雑録月刊誌だった。彼の短篇小説が提供されたことは実際にほとんどなかった。アメリカで出版された物語の一つ「芸術家の子供」の改訂版が一八七八年一月に『ティンズリーズ・マガジン』に再掲されたのは、経営者の破産直前のことであった。一八八四年三月にはベントリー社の『テンプル・バー』に「フィービー」が少し削除修正された形で、九一年八月には「レティー・コー」が大幅に遅れて掲載された。そして、「境遇の犠牲者」が一八九一年の後半に『ブラックウッズ・マガジン』に提示されたが、掲載されたのは九三年一月になってからだった。しかし、ギッシングが一八八〇年代半ばに何度か本格的な長篇小説の分冊出版を準備しようとしたとき、どれも不満足な結果となつてしまった。この問題はギッシングが単行本と分冊本の権利の両方を同じ当事者と交渉していたことによって更に悪化した。『人生の夜明け』は一八八五年の後半にスミス・エルダー社に受け入れられたが、『コーンヒル』での連載は八八年初頭まで延期された。その間に、『民衆』と『サーザ』(一八八七年)が同じ雑誌に連載される可能性は、様々な理由でジェームズ・ペインによって消されてしまい、ジョージ・ベントリーもまた「クレメント・ドリコット」は『テンプル・バー』に

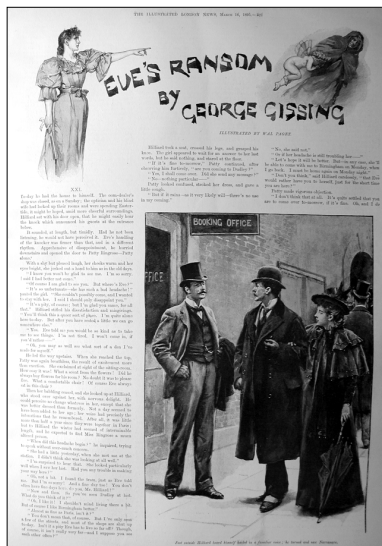
ふさわしくないと判断した。最後のケースでは、この書き終わっていた物語の原稿は断念（恐らくは後で破棄）されてしまった。もともと、ベントリーは単行本での出版の権利に対して気前よく支払おうとしたようであったが、ギッシングは弟への手紙で露骨に「Bは物語が『T・B』にふさわしくないと決まっている。全く予想通りだ。私が連載の鯨脈を打ち当てることは決してないだろう。さしあたりそいつは放置しておこう」(Letters 3: 130)と書いている。編集者としてのベントリーやペインに対するギッシングの侮蔑が完全に正当化されるかどうかはともかく、この落胆によって疑いなく彼は分冊出版の卑俗性にうんざりし、それが質の悪い作品と是正不可能な関係にあると思いつ込んでいたはずだ。ギッシングの態度の基調は、先に引用した妹エレンへの「もちろん卑劣な出版方法だ、あの連載形式は……私は阻止するために最善を尽くすつもりだ。私が高く評価する本は断じてこの方法で出版させたりしないぞ」(2)「2」という手紙でも触れられている。この強い侮蔑の念がすぐに宥められることはなかった。おそらくそれは彼の永続的な態度となっていただろう。

ギッシングが長期間にわたって自分の原稿を定期刊行物の編集者に管理させようとしなかったことは確かである。つまり、『三文文士』(一八九一年)が広く一般に歓迎され、彼が自分の著作権の交渉をプロの代理人に託すまで管理させなかったのである。A・P・ワットが最初にギッシングの書簡に登場するの

は一八九一年四月二十九日のことで、そのとき彼はこの代理人の証明書を写して、三巻本の『三文文士』の献本と一緒に弟のアルジェノンに送った。ギッシングが憤慨して原稿を取り戻して新しい代理人ワットに送ったのは、それからちょうど三ヶ月以上も経ってから、すなわち、『三文文士』に支払われた金額(たった百五十ポンド)以上を次の小説『流謫の地に生まれて』(二八九二年)に対して払うようにスミス・エルダー社に忠告することはできないと、ジェイムズ・ペインが一八九一年八月九日の手紙(Diary 253)で言ってきた後のことだった。結果は落胆するものだった。この新しい小説は結局ちょうどペインが言った金額で(もちろん代理人の手数料を引いた金額で)、エディンバラのA・C・ブラック社との契約に落ち着いた。しかし、ギッシングがワットは「大きな利益がなければ労をとってくれない」(Letters 5: 15)という結論を出す頃には、すでにベザントの文芸家協会と(当時はモリス・コリスに任せられていた)新しい著者組合^{シンジケート}のことを考えていた。以後、ギッシングの文筆活動は主にコリスによって管理された——少なくとも一八九七年の夏、彼が新しい代理人のジェイムズ・B・ピンカーと馴で鉢合わせし、この男こそ臨機の才のある代理人だと確信する一八九七年八月二七日までは(Diary 265)。遡ること一八九一年九月、旧友モリー・ロバーツは、ギッシングがスミス・エルダー社に代わって長期にわたる関係を築くことになる新しいロレンス・アンド・プリン社と接触させてくれていた。従って、コ

リスとピンカーの両者によってなされた交渉の大部分が、書籍出版ではなく連載出版に係っていたことは驚くに足らない。

一八九〇年代初頭、ギッシングの作家としての経歴に社会的・経済的な変化が見られたが、その前兆として彼が方向転換して連載出版に関与したことがあったのは確かである。もちろん、紀行文『イオニア海のほとり』（一九〇一年）や随筆集『ヘンリー・ライクロフトの私記』（一九〇三年）——両方とも彼の晩年にジェイムズ・ピンカーによって『フォートナイトリー・レビュー』に掲載された——の連載版を除くならば、彼の文筆活動の終盤に初版が分冊で掲載された物語風の小説はたった一篇しかない。しかし、『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』における『イヴの身代金』の週刊連載（図②）は、一八八〇年代半ばにギッシングが経験した月刊連載よりも、おそらく労が少ない割に報酬は多かった。すなわち、比較的短い物語を連載する権利に対して百五十ポンドの報酬を得ることができた。それにもかかわらず、実際に一八九三年初めから目につくのは、ギッシングが大量に短篇小説を創作したことである。この時期から書かれた約八十もの短篇があらゆる種類の定期刊行物に載せられた。時には、旧式の文芸月刊誌や新型の知的な月刊誌、そして人気のある新聞さえも含まれていた。しかし、ほとんど大多数は前に述べた新しい世代のロンドンのジャーナルであり、その代表格はニューンズの『ストランド』や『ハームズワース・マガジン』（それぞれ一八九八年と一八九九年の



図② 『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』に連載された『イヴの身代金』（1895年3月16日号）

創刊）といった中産階級に向けた六ペンスの新しい挿絵入り月刊誌である。とはいえ、ここで更に典型的と言えるのは、ジェローム・K・ジェロームによって編集された二つのジャーナル、つまり週刊誌『トゥデイ』と月刊誌『アイドラー』で、一八九四年から九九年にかけて計九つの物語と小品を掲載している。

上記の物語のすべてはコリスかピンカーによって掲載されたので、ギッシングと編集者が直に接触することは皆無だった。しかし、このことはギッシングの後期の小説にとって最も重要な連載の場となる三誌、すなわち一つの連載小説に加えて約五十の短篇や小品が掲載された月刊誌『イングリッシュ・イラストレイティッド・マガジン』と週刊誌『スケッチ』および『イ

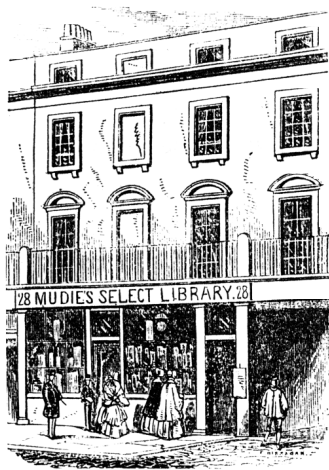
ラストレイティッド・ロンドン・ニュース』には当てはまらなかった。当時、三誌はすべてイラストレイティッド・ロンドン・ニュース社の所有であり、ジャーナリストのクレメント・ショーターによって編集されていた。ショーターが最初にギッシングと交渉したのは一八九三年三月の手紙であり、二人は徐々に友好的な契約関係を築いていった。気質や受けた訓練は相当に違うものの、同じ世代で経歴も似ていたので、明らかにギッシングはペインやベントリーほどショーターに対して疑念を抱いていなかった。両者の協力で五つの物語、「面目にかけて」や「判事と悪党」のように皮肉にも意外な展開をする物語、「原料」や「六ペンスの歌」のように凝縮された性格描写がなされる短篇が矢継ぎ早に生まれた。これらは不幸にもギッシングが生前に目を通した唯一の短篇小説集となる『人間がらくた文庫』（一八九八年）に収められている。

第三節 出版形態と文学形式

ギッシングの同時代における文学市場への不満が有能な代理人の雇用によってのみ取り除かれると言うことは、定期刊行物の性質が生産と分配の構造によってのみ決定されると思うのと同様に、愚直すぎるだろう。これらの問題点について見識をもつて深く理解するためには、出版形態と文学形式の複雑な相互関係について、後期ヴィクトリア朝全般だけでなく、本質的に

はギッシングの全作品においても、考えてみる必要がある。ここで我々は、ジャンルや様式の問題のみならず、長さや規模の問題にも注意を払わねばならない。要するに、複数冊での初版や伝統的な雑誌月刊誌を持つヴィクトリア朝の古い文芸出版社は、小説の通信社や近代的な都市部の定期刊行物とは違って、貸本屋制度の要求に束縛されていた。言い換えれば、十九世紀の終わりまで、ブラックウッド社、ベントリー社、スミス・エルダー社は未だにミューディーの貸本屋（図③）が決定することに従う必要があったのに対し、テイロットソン、ニュンズ、イラストレイティッド・ロンドン・ニュース社は臨機応変に活動する自由を持っていたのだ。

英国小説における「率直さ（candour）」について活発な討論がなされていたので、三巻本の独裁が単に長さや形態だけの問



図③ ミューディーの貸本屋（アッパー・キング・ストリート、1842年創業）

題ではなかったことは明白である。この長く続いた議論で、反対派は〔冒険、ミステリー、センセーションへの懐旧的な思慕を示す〕「ロマン主義」と（フランスの自然主義や審美主義に対して現代的な共鳴をはっきりと示す）「リアリズム」の旗印のもとで戦った。もし英国の小説家が作品をミューディー・セレクト・ライブラリーで配送されることを望むなら、時代後れのセンセーション・ノヴェルにかこつけてのみ、彼らは性的な問題の扱いを許される。そう言って反論したのは、パリ滞在から戻ったばかりのジョージ・ムアであった。この反論は一八八四年後半にロンドンの夕刊紙『ベルメル・ガゼット』に掲載された短い記事でなされ、投書欄での長い議論合戦を引き起こし、翌八五年八月には『リテラチャー・アット・ナース』という長い、表現が露骨な小冊子でも同じ議論が起こった。ムアは特にウォルター・ベザントの（一八八四年四月の王立協会での）公開演説とヘンリー・ジェイムズの（『ロングマンズ・マガジン』の記事での）答弁——両方とも「小説の技術」という見出し——に言及した。⁽¹¹⁾そこで、リアリストのジェイムズは、「意識的な道德目的」(Besant 24) ゆえに近代英国小説を賞賛したロマン主義者ベザントをはねつけ、その「道德的臆病さ」(James 519) がむしろ目につくことを示した。この議論は、一八九〇年一月の『ニュー・レヴュー』に掲載された「小説の率直さ」という論文集が示すように、世紀末になってもまだ続いていた。その中で、英国小説のバラ色の未来についてのベザントの生ぬるい意見に論

駁すべく、ハーディが任命された。⁽¹²⁾ジョージ・ムアと同様に苦々しく思っていたハーディは、「多くの英国小説に充滿するインチキ」に対して攻撃を始めるために『ニュー・レヴュー』の論文集を利用し、最後はムアが文学形態と出版形式をはっきり結びつけたことに話を戻し、「上品な雑誌と精選された貸本」に責任の大半を負わせた。結びとしてハーディは、中産階級読者層の倒錯した要求から小説を解放するためには、「本を借りるのではなく買うことができるような出版システム」を作るだけでなく、小説をまず「大人が主として読む新聞の文芸欄 (feuilleton) として」(Hardy 18, 21) 刊行しなければならぬと提言している。

英国小説の形態と形式の両方を近代化する必要についての長年の議論に対し、ギッシングの立場ははっきりしていなかった。彼はしばしば日記や書簡の中でロマン主義の代表者——特にベザントやペインがそうであるが、R・L・ステイヴンソン、H・ライダー・ハガード、アンドリュース・ラングも除外できない——について毒づいているが、リアリズムの擁護者との結束については多くを語っていない。実際、ハーディとムアは——ギッシングが彼らの文学的な計画に特別な共感を抱く可能性もあったであろうが——両者ともしばしば毒気を含む言葉で扱われている。文学の「率直さ」の議論に携わるとき、明らかにギッシングはどちらの味方にもつきたくなかったようだ。ギッシングは弟アルジェノンに「感動的な小品」の書き方について助

言すべく手紙を送ったついでに、「ウォルター・ベザントは王立協会に小説の書き方を指導してきた——すばらしい考えだ！——書いた問題では教訓などすべて無意味だ」(Letters 2: 212)と書いてるように、ベザントの「小説の技法」を蔑んでいるが、それは「道徳目的」を弁護していたからではない。一方、ジェイムズの反応については見過ごされたか無視されたようである。『「ニュー・レビュー」の論文集もまたギッシングからの反応は何もなかったが、わずか三ヶ月ほど前にエレンへの手紙の中でハーディの小説の限界について率直な意見として、「そうだね、第一に、彼の領域は狭い。彼が本当にうまくできるのは田舎に住む農民の生活と気質だけだ。……そんな歩き慣れた小道からそれた途端に、彼の力はなくなってしまうのさ。上流階級の人々を扱う際はいつも、彼の作品は無価値なものになる」(Letters 4: 104-05)と言っている。

しかし、この議論へのギッシングの唯一重要な貢献は、ジョージ・ムアの記事に応えて『ペルメル・ガゼット』に送った手紙にある。そこで判然とするのは、ギッシングはムアの「学派」との関係を断ちただけでなく、貸本屋制度に責任を持つ商人から、「自分の人気と収入を損なわないように最善を尽くすことを恐れている」(Letters 2: 276-77)芸術家たちへ、非難の矛先も変えたかったことである。これは出版社がミューディーの反応と彼の好みを恐れたために生じたことだが、ギッシング自身も『グランディー夫人の敵たち』の出版がすでにベントリ

ー社によって二年も延期(結局は無期延期)されていた。翌年の夏にギッシングが弟に宛てた手紙を読むと、彼の非難の動機がはっきりしてくる。ムアが自分の小冊子の出版を公表したとき、ギッシングは「ムアという男はミューディー社に対して攻撃すると言っているが、それがうまく行ったら、私は万歳しよう。とはいえ、あの男の中に粗野な気質があるのは気がかりだ。少し前にP・M・Gに掲載された彼の記事は気に入らなかった……彼の『モダンな恋人』はお話にならない駄作だ」(Letters 2: 323-25)と評した。「哀れな作で、想像を絶する俗悪さだ。私は読んだあと、あの男が作るものは何であれ見たくなくなった。彼の頭は粗雑でどうしようもない」(ibid. 327-28)というのが、小冊子を読んだ後のギッシングの結論であった。特筆すべきことだが、ギッシングの日記と書簡のどこを見ても、彼自身が長年にわたって購読者であったミューディーの貸本に対する非難の言葉は見出せないし、彼が三巻本の形態を少しでも独裁だと思ったことを示す資料もほとんどない。貸本制度そのものの崩壊が明らかになったとき、ギッシングは弟アルジェノンの文筆活動への影響を心配していたものの、それ以外の点では、「出版社は完全に三巻本の出版を断念したがっているようだし、文芸家協会も同じ趣旨の決議を下している。それに関する私自身の利益は全く見当がつかない」(Diary 343)と語っているように、無関心だった。

それでもなお、十九世紀末頃の英国小説を近代化する計画は、

長さや規模の問題と重大な関係があった。しかし、何よりも重要なのは、三巻本の形態と小説の長さの間に何ら絶対的な関係がなかった点を憶えておくことである。ヴィクトリア朝において三巻本の単語数は三十万から十万以下までであった。しかし、複数巻の初版が優勢だったので、小規模な小説、すなわち約三万語から六万語の範囲の小説——世紀の後半に使われるようになるイタリア語「ノヴェラ」(中篇小説)——の創作は思いとどまる場合が多かった。とはいえ、後期ヴィクトリア朝にかけて三巻本小説の平均的な長さが徐々に短くなってきたことは、作者も読者も小説の叙述の背景を縮小する必要性を感じるようになったことを示している。一例を挙げてみよう。ウィルキー・コリンズの「一八六〇年代の四つのセンセーション・ノヴェル」はそれぞれ平均が二十五万語強であったが、彼が一八八〇年代に出版した六つの三巻本小説は、ほぼ同じジャンルだったにもかかわらず、それぞれ十二万語程度の長さしかなかった。それでもやはり、三巻本版は物語構成にほぼ同じ規模の三つ段階(簡単に言えば、始まり、中間、終わり)——ロマン主義の小説家がリアリズム作家よりも自分の好みに合うと思った三つの段階——を強要する傾向があった。『オックスフォード英語辞典』で引用された「ノヴェラ」の初例が、「長篇小説の規模で書かれた現代の作品で、多くのノヴェラが具現する形式美を持つものはほとんどない」と言ったアメリカ・リアリズムの大御所W・D・ハウエルズのものだったことは、偶然ではない。最後に

我々が認識しなければならないのは、英国小説を近代化する計画には、ますます縮小に向かう全体的な傾向だけでなく、作品の規模は出版形態のような外部の強制によってではなく、むしろそのテーマ固有の性質によって決定されるべきだという、理想主義的な願いもまた含まれていたことだ。換言すれば、そうした作品こそがまさに芸術作品だったのである。

第四節 変貌する文学市場への両価感情

ここまでは証拠の確実な裏付けがあったが、ここでは馴染みはないが関連のある二つの点を強調しておきたい。それは、当時の定期刊行物がノヴェラを含むものの、それだけには限定されない、無駄なスペースのない文学形式を奨励するために肥沃な場を提供したということ、そして同時に、この過程で芸術家志望の者は市場が課す題材の制約から逃れられなかったことである。後期ヴィクトリア朝の数十年前、クリスマス特集年報と普通の月刊誌や週刊誌の(今ではクリスマスのみならず夏季にもしばしば出版される)休暇特別号は、伝統的な雑録の形態を拒み、代わりに単一の短篇小説を掲載する傾向があった。実際、新型のコンパクト版ではあるが、明らかにロマン主義的な様式の「スリラー物」に、これらは属していた。独創性に富んだ例としては、一八八三年の『アロースミス・クリスマス年報』として出版された「ヒュー・コンウェイ」による『呼び戻されて』

や、一八八七年の『ビートン・クリスマス年報』として出版されたアーサー・コナン・ドイルの最初のシャーロック・ホームズ物、『緋色の研究』がある。

しかし同時に、リアリズムの傾向があるノヴェラには出版の場が多かった。特筆すべきは『グラフィック』や『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』の豊富な休暇特別号で、例えばブレット・ハートによるカリフォルニアの地域色物語などが、しばしばそこに拠点を見出した。連載出版もまた明らかに近代的な形式としての短篇小説の構成に貢献していた。ヴィクトリア朝初期の定期刊行物では、しばしば「完結もの (complete tales)」と呼ばれるもの——「短篇小説」という言葉は米語が起源であり、英国ではノヴェラの直前に一般使用されるようになったにすぎない——は、本格的な小説の分冊と分冊の間を埋めるものとして機能するか、ゴシックの趣を添えるクリスマスの季節と結びつくかのどちらかの傾向があった。世紀末の頃には、短篇小説ははるかに広範かつ頻繁に出版されただけでなく、連続物として登場するようにもなった。最も目についた例はニューズズの『ストランド・マガジン』に掲載された探偵小説のシリーズで、特にアーサー・モリスンの「犯罪調査官マーティン・ヒューイット」、そしてもちろんコナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」であった。

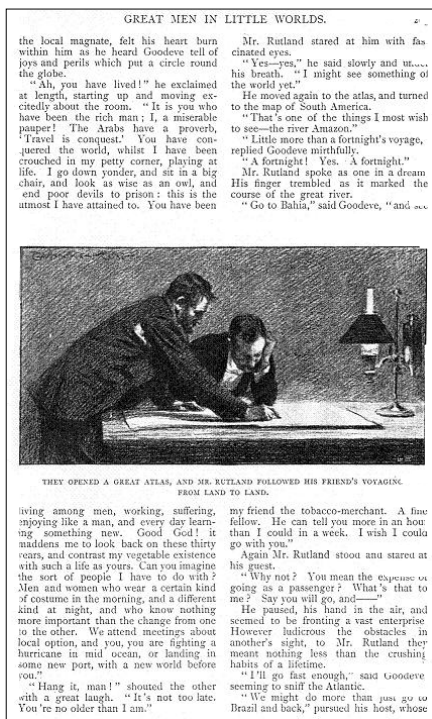
しかし、リアリズムの傾向がより強い連続物に、連載の場が不足することはなかった。とりわけキプリングの筆によるもの

は、後に『高原平話集』(一八八八年)や『ストーリーとその仲間』(一八九九年)のような短篇集に収録された。一八九〇年代初頭から、ティロットソン小説部局でさえ(それぞれ五千語程度の)短篇小説を四半期ごとか半年ごとに大量に配信するようになった。そこでは、よりセンセーショナルな題材に加え、「新しい女」の描写で有名になったモウナ・ケアドや「イオータ」のような作家による非常に当世風の力作が含まれていた。そのほんの少し後に、例のボルトンの出版社が、取引先用の特集ページにあるコラム以下の隙間を埋めるために、非常に短い(約二千語の)「掌篇 (story-stories)」を大量に提供し始めた。ロンドンの新聞もまた即座にこの流行の様式に飛びついた。一八九〇年代半ばまでに、『トゥデイ』や『スケッチ』のような週刊誌は、同じ文芸作家による短篇小説を連続して定期的に掲載した。十九世紀末までに、当時の定期刊行物の編集者にとつては、短篇小説の連続物の方が長篇小説の連載よりも明らかに魅力的な選択肢になっていた。

これらの新しい出版様式に対するギッシングの反応は決して単純ではなかった。一八九〇年代半ばに、代理人と編集者の助言に応じて、ギッシングはコンパクトな形式の物語の制作にいくついろと従事し、少なくとも経済面において非常に満足のいく結果を得ていた。一八九五年には三巻本小説がすでに落ち込んでいた¹⁶ので、ギッシングは本格的な小説をまったく出版せず、代わりに性質の異なる三つのノヴェラを上梓した。最初の一冊

長い中篇小説(約五万五千語)は現実的な恋愛小説『イヴの身代金』で、『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』の十三回の連載物として書かれ、その後すぐロレンス・アンド・ブリン社から一巻本で再版された。ギリシャの設定で書かれた『埋火』(一八九五年、約三万二千語に対して百五十ポンド)と喜劇的な諷刺小説『下宿人』(一八九五年、二万七千語に対して五十ポンド)は、コンパクトな一巻本小説の別の新シリーズのために書かれ、それぞれアンウィン社によるオートノミ・ライブラリーとマックス・ペンバートンによって編集されたカッセル・ポケット・ライブラリーとして出版された。同年三月、ギッシングはジェロームの『トゥデイ』のために「小人たちの私生活」というシリーズとして週刊連載で六つの性格描写の小品を創作した。これはすぐにショーターの『スケッチ』のために書かれた類似した二十篇のシリーズとして『人間がらくた文庫』(一八九八年)の出版につながった。この後も、ギッシングの傑作に数えられる五つの短篇小説の連続物で、一八九六年五月から九月にかけてショーターの月刊誌『イングリッシュ・イラストレイティッド・マガジン』で出版された「小世界の巨人たち」が続いた(図④)。千語の小品につき三ギニー、四千語の短篇小説につき

十二ギニー、生計を立てるには骨を折って『三文文士』を創作するよりも、これの方が明らかにずっと気楽な方法であった。しかし、だからと言って、ギッシングが作品の圧縮を審美的な意味で肯定的に見ていたと言うつもりはない。このような印象を確認すべく、ギッシングの本格的な小説の長さを比較してみよう。『暁の労働者たち』(一八八〇年)の二十八万以上という途方もない語数に匹敵するものが続いて出ることとはなかったものの、残りの三巻本小説は長さの点で大きく、ウィルキー・コリンズと比較すると、徐々に縮小の過程をたどっているという感じはない。実際、ギッシングの日記や書



図④ 「小世界の巨人たち」シリーズの短篇『治安判事と浮浪者』『イングリッシュ・イラストレイティッド・マガジン』(1896年6月号)

簡には、彼が首尾一貫して大がかりな小説を書きたいと明らかに思っていたこと、そして小規模な作品に対する（しばしば軽蔑と嫌悪が混じった）拒絶的な態度がはつきりと読み取れる。ギッシングの一九〇一年九月四日の日記には、「快晴。雨はなし。短篇に取りかかるも、やる気なし。自分を鼓舞するためには大きなキャンパスが必要。夕方、真面目な本について考え始めた」（*Diary* 255）と書かれている。結局、長篇も短篇も放棄したが、そこで使っている言葉も感情の構造も典型的なものである。事実、一八九〇年代半ばの『ギッシング書簡集』の第五巻と第六巻において、これよりも激しい言葉がしばしば出てくる。『スケッチ』に寄せられた小品は「ガラクタの山」（*Letters* の21）にすぎず、最初の中篇『イヴの身代金』は結局「完全なゴミ」（*Letters* 5: 210）、あるいは「まったくのクズ」（5: 214）、最後の中篇『下宿人』は「このシリーズの短い本とはもう関係をもたない」（*Letters* 6: 87）と彼に決心させるような「つまらない話」（6: 76）だと記されている。一方、短篇小説についてギッシングは彼の代理人に、「私が本を書いてしまうまでは絶対にストップしなければならない。私は近頃かなり本道をそれてしまったので、これまでに失ったものの埋め合わせをする必要がある」（6: 67）と、たしなめるような口調の手紙を書いている。それから二年ほどして本格的な小説『渦』の創作に取りかかったとき、すぐさま彼はそれを「堅実なもの」（6: 74）とか、「私が長年してきたことのどれよりも中身がある」（6: 215）

と語るようになった。変貌する文学市場とその物語形式への衝撃に対するギッシングの矛盾した反応が明らかに示しているように、彼は英国小説を近代化しようとするリアリストの計画に対して根本的に両価感情を抱いていたのである。

* * * *

結論としては、ギッシングの文学市場に対する持続的な欲求不満も、市場を支配するように思えた経営者、編集者、代理人との闘争も、部分的には自分自身に対する不満や闘争であったと言わねばならない。本章で概略した出版文化の変貌の前後いづれにおいても、ギッシングはずっと孤軍奮闘した作家であった。彼は新旧両方の出版制度に満足せず、後戻りするか先へ進むか決められず、周囲で起こっていた激しい文化的な衝突では、どちらかの味方をするのをいやがった。自分の社会的地位についての強い不安感があった——それは時には俗物根性の形で現れた——ので、近代化のプロセスに対するギッシングの疑念は、モダニズムの文化的な問題のみならず、民主主義の政治的な基盤にも及んでいった。このように分裂した気持ちには、連載出版に対する感情において特に興味深い形で現れている。ギッシングははっきりした古典的普遍性を持つ本に物理的な愛着を抱いていたが、その暗い側面として彼は、明らかに一過性のものであるがゆえに知識と思考そのものの安定を脅かすように見える近代的な定期刊行物を恐れて嫌悪していた。連載形式に対する

侮蔑は、初期ヴィクトリア朝において貴族的な傾向のあった作家の間で頻繁に見られた。例えばトマス・アーノルドは、一八三九年のラグビー校での説教において、「精神に住み着き、いわば一滴一滴と染み込む」ことで機能を果たす「近代の娯楽作品の……特別な出版方法」が及ぼす狡猾な道徳的影響に対して警告を発した。⁽⁷⁾しかし、そのようなスタンスは、ディケンズやサッカレー、トロロプやジョージ・エリオットの筆による当時の偉大な作品の初版の多くが連載形式で出版された後では、減多に見られない場違いなものであった。ここでギッシングの態度をヘンリー・ジェイムズのそれと比較することは興味深いだろう。ジェイムズの「市場との軋轢」がマイケル・アネスコによって実に手際よく分析されているからである。生涯も終わりに近づいた頃、ジェイムズはヴィクトリア朝文学の大御所たちが「一ポンド連載出版」によって越えた「アルカディアの谷」を回想し、「量と数で窒息させられる」当世の作家たちが直面している「イバラの迷宮」を、その谷と対比させた。⁽⁸⁾このように現在の苦しみに対する懐古的な補償も与えられなかったギッシングが、緊張状態——一八八〇年代と九〇年代の英国の初期モダニズム作家たちが恐らく不可避的に共有していた運命としての緊張状態——を極端な形で経験していたのは明らかである。

註

- (1) Walter Besant, "Notes and News," *The Author* 5:8 (January 1895): 208.
- (2) ベザントの一文が一八九五年一月二日号の『デイリー・メール』の「作家と読者」でそのまま引用されたあと、ジェローム・K・ジェロームもクレメント・ショーターも（それぞれ『トゥデイ』と『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』の編集者）、自分たちのジャーナルは最近ギッシングの物語にスポットを当てたという主旨の書き込みをした。その書き込みもまた「ジョージ・ギッシング氏と定期刊行物」という見出しで一月三日と四日に出版された。
- (3) ここで重要なのは以下に挙げる三つの（ゲットマンの文献書誌学的、グリーストの物語論的、フェルツの新マルクス主義的）アプローチである。Royal A. Getmann, *A Victorian Publisher: A Study of the Bentley Papers* (Cambridge: Cambridge UP, 1960); Guinevere L. Griest, *Mudie's Circulating Library and the Victorian Novel* (Bloomington, IN: Indiana UP, 1970); N. N. Feltes, *Modes of Production of Victorian Novels* (Chicago: U of Chicago P, 1986).
- (4) 先駆的な文献は P. J. Keating, "Novelists and Readers" in *The Haunted Study: A Social History of the English Novel, 1875-1914* (London: Secker and Warburg, 1989) 9-87.
- (5) ヴィクトリア朝の連載小説の楽しみを最も完璧に分析したのは Linda K. Hughes and Michael Lund, *The Victorian Serial* (Charlottesville: UP of Virginia, 1991).
- (6) James Payn, "Penny Fiction," *Nineteenth Century* 9 (January 1881):

- 153.
- (7) 当該のパラグラフは拙著で詳述された議論を要約したものであ
る。 Graham Law, *Serializing Fiction in the Victorian Press* (New York:
Palgrave, 2000) 3-38.
- (8) See Charles Johanningsmeier, *Fiction and the American Literary
Marketplace: The Role of Newspaper Syndicates in America, 1860-1900*
(Cambridge: Cambridge UP, 1997) 162-67; Law, *Serializing Fiction* 72-
74.
- (6) とはいえ、キッシングがいちもシヨーターを好意的に扱って
たわけではない。例えば一八九三年十二月一日の日記では、「シヨ
ーターからはまだ小切手も『イングリッシュ・イラストレイティ
ック』を受け取っていない。またやや卑劣な行爲だ」(Diary 322)
と書いている。
- (10) George Moore, "A New Censorship of Literature," *Pall Mall Gazette*
(10 December 1884): 1.
- (11) Walter Besant, *The Art of Fiction* (London: Chatto and Windus,
1884); Henry James, "The Art of Fiction," *Longman's Magazine* 4.23
(September 1884): 502-21.
- (12) See Walter Besant, Eliza Lym Linton, and Thomas Hardy, "Candour
in Fiction," *New Review* 2.1 (January 1890): 6-21.
- (13) W. D. Howells, "Some Anomalies of the Short Story," *Literature and
Life* (New York: Harper, 1902): 116.
- (14) See Bret Harte, "The Rise of the 'Short Story,'" *Cornhill Magazine*
ns 7 (July 1899): 1-8; Keating 39-43.
- (15) See Graham Law, "New Woman Novels in Newspaper," *Media
History* 7.1 (June 2001): 19-22.
- (16) ロンドンで出版された三巻本の数は、一八九四年の百八十四か
ら九五五年の五十二に落ち込んだ。 See Griest 208.
- (17) Thomas Arnold, *The Christian Life, Its Course, Its Hindrances, and
Its Helps: Sermons Preached Mostly in the Chapel of Rugby School*, 4th
ed. (London: Fellowes, 1845) 40-41.
- (8) Michael Anesko, "Friction with the Market": Henry James and the
Profession of Authorship (New York: Oxford UP, 1986).
- (19) Henry James, *Notes of a Son and Brother* (New York: Scribner,
1914) 19-21.

(野々村咲子訳)